

# “Cakes and Ale” の一考察

佐藤 孝

A Study of “Cakes and Ale”

Takashi SATO

(昭和48年10月31日受理)

## (1)

‘Of Human Bondage’ (1915年) は Maugham 文学の頂点である。彼はこの作品では人生の一時期を卒直に記録し、人生観、世界観を克明に語る。そして、この人生観、世界観がその後の作品の底流をなしていることは多くの論者が指摘するところである。しかし、小説の手法、文体の点から Maugham 文学全体を考察するなら ‘Cakes and Ale’ or the Skeleton in the Cupboard (1930年) が最も優れていることを認めねばなるまい。作者自身、1950年版の Modern Library Edition の序文の中で、

I'm willing enough to agree with common opinion that ‘Of Human Bondage’ is my best work. But the book I like best is ‘Cakes and Ale.’ It was an amusing book to write.

と吐露し、Sue Jones<sup>1)</sup>との愛が終わった後も長い間その確信は揺がず、1959年には

‘Cakes and Ale’ is still my favourite among my novels.<sup>2)</sup>

と述べているし、80才の誕生日の記念として豪華本を出版していることなどからも、Maugham 好みの作品であったことが知られる。更に ‘Of Human Bondage’ の Uncle William と妻 Louisa が ‘Cakes and Ale’ で Henry と妻 Sophie となって引き継がれ、Philip Carey が Ashenden に擬せられている事実にも、この二つの長篇を並置する作者の意気が感じられる。

叙述が過去の episode にゆるやかに進み、その episode の中で更に過去へと溯る構成の中で、虚構の世界が語り手の生きる現実の時間の経過と巧みに並行し、作者の信奉する ‘the teller of tales round the fire in the cavern that sheltered neo-

lithic men<sup>3)</sup>を具現する口語的な物語形式がこの作品を技法の点で第一級の作品とする要因である。

‘The Summing Up’ は Maugham の文体を解明する重要な鍵を提供する。その中で彼は作者の特質を生かすことが良い文章を書く秘訣であるとし、彼の場合はそれが、‘lucidity, simplicity and euphony’ であるとの結論に至っている。<sup>4)</sup> 思想自体が明確であるならその結果として明解な表現が生れるのに対し、言葉の歪曲は平凡な思想の仮面であるとし、散文に適した土壌は平易で控え目な土壌であり、同時にそれが自分の性格に適していると考える。耳の感受性を重視しその為には文法的に正しい語句を犠牲にすることも認めようとする。

彼のこの考え方は、文体の根源を経験の個人的様式にとって必然かつ有機的なつながりのある表現とする J. M. Murry, ある題材に対する最良の表現手段の選択を文体と定義する Graham Hough, 更に自らを表現する最上の方法を文体と考える F. L. Lucas と同じ基盤に立つ概念であり、普遍性を持っている考え方である。

Maugham は英語を正しく書く努力を続け、納得できるところに到達したと述べているが、その文章が名文であるとは考えていない。確かに慣用語句と clichés を多用する作品も幾つかある。時代性に支えられるこの種の語句を拒み、永続性のある語句を見出すことが優れた作家の特質と言えるが、Maugham は意識的にその方法を避ける。そして口語的表現を十分に作品の構成の中に生かす努力を惜しまない。この慣用語句と clichés は特に ‘Cakes and Ale’ のような ‘first-person-singular’ の作品に多く、随筆、紀行文にはその用例が少ないことから、その使用が彼の小説技法の一つであると考えられる。作者の思想、感情が正確に伝達される時その作品の文体が存在するが、同時に文章それ自体

としての完璧さとか美しさを具える場合は少ないのであり、ある表現が小説の構成上で適切な役割を果たしている限り、その作者特有の文体が確立していると言える。

前述の Maugham の主張が実際の小説の枠組の中でどのような姿を示すであろうか。小説の構成、技法と結びつく時、彼の考えは実現しているであろうか。更に、彼の文体が彼の人生観、世界観を表現するのに適切なものであろうか。技法上、最高の作品である 'Cakes and Ale' に焦点をあてこの点を考察することが小稿の目的である。

## (II)

文体に関する Maugham の主張 (The Summing Up, 1938年その他) が彼の推奨する 'Cakes and Ale' においていかに具現されているか。この作品を支える時間的構成に関する若干の検討から始める。

この小説の叙述の時間は [Ashenden と Alroy Kear との会合 → Drifffield の伝記の資料提供の依頼 → Mrs. Drifffield (Amy) の懇願 → Ashenden の Blackstable 訪問 → Rosie との再会] の経過をとる。この叙述の時間は遅々として進行せず、読者の時間的意識は稀薄にされる。更に虚構の世界が過去へと湧り、Ashenden の意識がそこに停滞し、小説の意識のかたちとしての時間は過去へと完全に移行される。Proust に発する意識の流れが心理の中に押し寄せる過去の思い出を連想のおもむくままに提示するに對し、この作品において Maugham は時間の同時的進行を消失させることによって Ashenden の心に生起する回想を現在の意識の描写へと変貌させている。

'a narrator of a tale around the fire' を標榜する Maugham が文体に関して 'lucidity, simplicity and euphony' を主張するのは作品の readability を究極の目的にしている為であるが、彼はこの作品では Ashenden と Rosie の再会という climax を描く為にこの 'readability' の生命と言える 'irreversibility of logic and time' の原則を犠牲にせざるを得なかった。その犠牲を最小限にとどめ、しかも Rosie の子供の死という衝撃を強烈にする為 Maugham は 'action sequence' とでも名付けられる手法を用いている。

Maugham はこの小説で短篇小説で屢々展開する ABA' の三部形式をとって現実の描写 (叙述の世界) から過去の物語 (虚構の世界) に移り、最後に現実の描写

に帰る。しかし短篇小説では AA' と B は性格の違い、美と醜、青春と老年、富と貧という対比を目的にしているのに対し、'Cakes and Ale' ではこの形式をとりながら AA' と B の間の時間的感覚を麻痺させる技巧を加えている。それは一つの実験小説の形をとったこの小説の全体的な構成と情緒的、感覺的論理に支配された言語形式から生れた Maugham の知恵であった。

二つの世界の時間的轉換は40年という長い間隔を含め11個所にみられるが、読者の心理的抵抗を避け、物語進行上に大きな亀裂を与えない轉換である。例えば Chapter II と III の間には40年の年月が存在するのだが、Chapter II の終りの一節と III の冒頭の一節に、一つの事物を二つの世界の中で描写する手法とか類似する場面を並置するなどの工夫が用いられ、時間的ギャップを感じさせない。これは菊池寛の長篇小説の各章のタイトルがその章の内容とするものの総括になっているのは勿論であるが次の章の内容によりふさわしく、その予告になるという不思議な名付け方をしているのと同趣向である。この轉換は、他の個所についても見出すことができ、いわば「記憶の暗転」とも言うべき手法である。次に具体例をあげ考察してみる。(Text の頁は Heinemann 版 1966年による。)

### ① Chapter II ↔ III

ア) The curtains were of a heavy red rep. (p. 31) ↔ I saw it as though it were a scene in a play. (p. 32)

イ) There was about the room an amusing air of the eighteen eighties (p. 31) ↔ with their old-fashioned ways and old clothes (p. 32)

ウ) ...water colours of romantic scenes (p. 31) ↔ a landscape painted in oils by a painstaking artists of the middle-Victorian era. (p. 32) 他

この手法を効果的にするには、このように多くの人々が経験する日常的な事柄によって喚起させる方法、つまり感覚を通して心理的效果へ導く方法が必要である。Maugham はその場合、暗示的な表現よりも日常的な事物の描写という直截簡明な表現に頼っている。

### ② Chapter III ↔ IV

ア) Mrs. Drifffield sent a dignified letter to the press (p. 39) ↔ I received a letter from Edward Drifffield's widow. (p. 41)

- イ) They had never been able to 'abide' the second Mrs. Drifffield. (p.40) ↔ from Edward Drifffield's widow. (p.41) 他
- ③ p. 43
- ア) I gave Mrs. Drifffield's letter a second glance. ↔ I remembered vividly the luncheon to which she referred. (in the letter)
- イ) There was a softness in Roy's voice. ↔ with no intelligence and charming manners.
- ウ) ...asking me to go down and stay (p. 42) ↔ I happened to be staying for a long week-end (p. 43)
- ④ Chapter IV ↔ V
- Mr. Drifffield を訪問し意気揚揚と引き揚げる Mrs. Hodmarch 一行との雑談の中で Ashenden が何気なく話題にした 'to eat his peas with a knife' は次章の自転車練習の思い出に結びつく。
- ア) I've tried over and over again and I can never get them stay on. (p.53) ↔ I tried and tried. (p.55)
- イ) You have to balance them on the flat. (p.53) ↔ You entered the gateway without holding on to the handles (p.55)
- ウ) ...they roll like the devil (p.53) ↔ I tried several times to mount, but fell off each time. (p.56) 他
- ⑤ Chapter X ↔ XI
- Chapter X の終りにおける Lord George の騒ましい話し振りと、その中に紛れ込む格言は the Drifffields の行状を Ashenden に語る場面であるが、その言葉の要所要所で作者は George の話し方に対して批判を加える。これは次章で Drifffield の文体をとりあげ、Drifffield の評価へと話を進める伏線である。
- ア) I had never thought Lord George were blatant. (p.106) ↔ his dialogue was such as could never have issued from the mouth of human being (p.107)
- イ) ...he spoke after this fashion (p.106) ↔ an easy mixture of the classical and slangy, ...his style, acquiring conversational ease. (p.107)

## ⑥ Chapter XI の前半

6章にわたる40年前の回想を一気に断ち切ることは作者にも読者にとっても抵抗がある。一度消し去った過去の流れが思いがけず水しぶきをあげ、同じ渦が幾度も現われることになる。

Musing thus over the past (p.107) → Though these recollections have taken so long to narrate (p.115) → I was still occupied with my idle fancies. (p.115)

こうして幾度か叙述の世界と虚構の世界を行き来して、次第に読者の心を Ashenden の現在の時点へと誘い込む。

⑦ p.116 に至って漸く Kear との約束に辿り着いた Ashenden は彼の回想の中での疑問に現実の世界から解答を与えようと試みる。過去の事件を現在の日常的な空間の中に引き寄せ充分に説明を加えるのである。

ア) ...there is no one to take his place. A few septuagenarians are sitting up and taking notice. (p.115) → Who could possibly succeed Edward Drifffield? I'm not fifty yet. Give me another twenty-five years. (p.116)

イ) If, as I think, longevity is genius, few in our time have enjoyed it in a more conspicuous degree than Edward Drifffield. (p.114) → It's just a question of pegging away and living on longer than the others (p.116)

## ⑧ Chapter XII ↔ XIII

次のイ) の例は現在の叙述から虚構の時間へと転換する個所で現在の Ashenden が見ている女性が回想の中の女性へと姿を変える。Maugham にとって時間は思索の世界において永久の可能性として止まっている一つの抽象概念ではなく、事実に即した構成感覚、しかも創作過程において意識的に形態化できる体験なのである。

ア) It was at that same table that I had eaten my hearty breakfast and my frugal dinner, read my medical books and written my first novel. (p.138) ↔ I read seriously for an hour or two, ... and after that wrote novels and plays... (p.140)

イ) I have no notion why, but it made me

· think of a woman...with her other hand beckoning (p. 138) ←→ stood Mrs. Driffield. ... she held out her hand and shook mine... (p. 141)

⑨ Chapter X XI ←→ X XII

ア) I lost touch with Driffield (p. 202) ←→ ... I now learned roughly what had happened to Driffield (p. 203) 他

ここでも現在の出来事が過去の出来事の空白を埋める形で存在し、35年以上の時間を一気に Ashenden の世界に引き寄せる抵抗を柔らげている。

⑩ p. 203 の前半 ←→ 後半

ア) ...to catch the five ten to Blackstable (p. 203) ←→ he had travelled with her and Barton (p. 203)

⑪ Chapter X XII ←→ X XIII

ア) She wrote a charming letter of congratulation to Driffield. (p. 206) ←→ the chauffeur had a note for me asking me to lunch with Mrs. Driffield next day. (p. 208) 他

Mrs. Trafford の書いた手紙が時を越えて Ashenden の手元に届けられたような錯覚を読者に与える効果である。

こうして時をへたでた「叙述」と「虚構」の描写を考察すると Maugham の一つの特徴が明確になる。つまり、現在の時間の持つ可逆性、非指向性は過去の時間の持つ定着性、即自性と対照的に捉えられるのではなく、現在は過去の存在をつきとめることによってその存在を保証される他者の時間なのである。彼の思惟的な時間の概念と創作上の時間的把握の間に大きな違いのあることに注意したい。Maugham はこの概念を創作で実現する為に 'The Summing Up' における主張である。

I saw the short story as a narrative of a single event, material or spiritual, to which by the elimination of everything that was not essential to its elucidation a dramatic unity could be given.<sup>5)</sup>

を生かし、narrative に必要な 'the speed of events, the actuality of objects'<sup>5)</sup> を長編においても維持しようと努める。彼の表現の simplicity, lucidity と上記の「記憶の暗転」の手法はこの為に

効果的であったと言えよう。

(Ⅲ)

小説の会話の言語が日常生活の言語と異なるのは当然である。小説の会話は実生活の会話を模倣するが、文学としこの要請から小説の plot を効果的にする機能を帯びることになる。形態上、常に a separate paragraph をとる唯一の場合と言え、<sup>7)</sup> 通常の会話にみられる 'the randomness of the subject matter, the lack of an overall contrived pattern, the absence of any conscious planning'<sup>8)</sup> が薄れるのがその特徴である。

会話によって人物の性格を裏付ける必要のある場合、会話に literary な色彩が濃厚になる。しかし 'Cakes and Ale' での story を進行させる Ashenden と Kear の会話は没個性的であり、二人の性格を示す会話は影をひそめている。ここでは Maugham は会話を人物描写や plot に関連させることに無関心のように思える。性格を出発点とするこの長篇小説にとってこれは奇妙な現象であるが、作者は人間の性格を固定したものと考えず、いくつかの事件に対する反応の集約とし、会話で性格を描写する convention に対してこの小説で一つの挑戦を試みたと思われる。

例えば、Ashenden と Kear の会合で、Driffield の評価について意見が別れ激しい応酬がみられる Chapter II での会話は、Driffield についてある一人の人間が立場を代えて意見を述べている感があり、二人の個性をその会話からうかがうことはむずかしい。この場面では narrative, descriptive の二つの層が巧みにバランスをとりつつ、Maugham の文学観が具体的な小説の表現に融け込んでいるが、first-person-singular の制約もあって会話そのものの言語は効果的とは言えない。first-person-singular は realistic な態度、point of view に関して功罪を判断されるべきでこの技巧による人物の性格描写は第二義的と言えよう。

二人の長い会話の構成を検討してみよう。「影響力のある人物に対して異を唱えようと不安なのでは」という Kear の間に対する Ashenden の答、'Not particularly.....in some Italian pension'. (p. 25) は、「Mrs. Driffield は私に会って喜こんだとは思われない。」という Ashenden の言葉に対する Kear の弁護の一節 'Oh you're quite wrong. ... I really feel sorry for her.' (p. 23) と軌を一に

し、その論理構成は「相手の考えを否定→その論証（一般論）→自分の経験を照合→感想」である。更に Driffield の作家としての人気を強調する Kear の会話 'One has to…… Driffield has come to stay all right.' (p. 25) は自分の批評の正しさを力説する Ashenden の言葉 'I think……how Marius bored me.' (p. 26) と同じ論旨、口調である。また、p. 116 から p. 131 にかけての二人の虚虚实実な会話は相手の真意をうかがおうとする Ashenden の短い言葉と、自分の意図を小出しにする老獪な Kear の言葉という第一の pattern, 「依頼」をカムフラージュし Ashenden の意識を袋小路に追いつめようとする Kear の甘言と、言質をとられまいとする Ashenden の用心深い言葉の第二の pattern の繰り返しであり、二人の発話の統語のレベル、文法のレベルを支配する思考の過程が作者自身の動因から生れていて、叙述の構造が類似している。二人が相反した考えを述べながら、その論証の構成と言語が類似していることは Hugh Walpole が、

'There are in one conversation the very accents of my voice.'

と J. B. Priestley に告白したのに対し、Maugham は Walpole に宛てた手紙で、

'He (Kear) is made up of a dozen people and the greater part of him is myself. There is more of me in him than of any writer I know.'<sup>9)</sup>

と述べていることから知られる通り、この小説における Ashenden — Kear の対立概念は同一人物の二面にすぎないことを物語るものである。

一方、Mary-Ann と Mrs. Hudson の二人は人物、会話の関連で特殊な役割を与えられている例外である。Ashenden の即物的な眼はこの二人の生命の意欲に導かれ、Rosie の抒情の世界を理解するようになる。Ashenden と Rosie の橋渡しとなる重要な立場にあり、作者はこの二人の性格描写と会話の関連に意を用いている。

Mary-Ann: 'We're goin' to eat that for our supper. If you'd wanted a second 'elpin' why didn't you 'ave one when you was 'avin' your dinner?' (p. 64)

Mrs. Hudson: 'Oh, I've got nothin' much to complain of except that I'm not so young as I used to was. I can't do so

much as I could when you was 'ere.' (p. 135)

このように二人の会話は vulgar, blatant であるが、humanity, generosity に富む暖かな言葉で構成され、それぞれの性格と会話が明確な姿で捉えられている。

この作品に寄せる Maugham の満足感、幻影としてある距離から見つめてきた Sue Jones の面影を Rosie の姿を借りて十分に描くというカタルシスによるものである。心の暖かさ、おだやかな気質、優れた感覚、そして美しさの中に Maugham を包んだこの女性は Maugham 文学の中で心に最も快い印象を刻み込む人物、'the sun shining silver' (p. 116) の存在である。'Cakes and Ale' は Maugham の作品の中で暖かさを意じさせる唯一の作品と言えるが、その暖かさは Rosie の個性から生まれ、Ashenden — Maugham に向けられた Rosie の言葉の暖かさでもある。Rosie の会話は少ない。

She was never a great talker. Often when, the night being fine, we decided to walk back from the music-hall at which we had been spending the evening, she never opened her mouth. But her silence was intimate and comfortable. (p. 166)

特に Ashenden との出会いから親密になるまでの Rosie の言葉は断片的である。しかし直截的な言葉であり、感情の底にまで及び、Ashenden を生気づけるリズム感が満ちている。

Oh, I'm sorry. I knew I should fall off the moment I saw you. (p. 56)

I think bicycle's lovely don't you? (p. 57)

Maugham は Sue の面影を心に秘め直接的ではなく状況によって彼女の容姿、はだあい、雰囲気表現する手法をとっている。彼女の周辺の人々の会話、彼女をとりまく出来事によって次第に彼女の姿が浮かび上って来る。そして彼女の全貌が読者の眼に映じ始めると、彼女は視界から消え、老年の彼女と Ashenden との再会まで姿を見せない。ところが Mrs. Iggulden としての Rosie の発話は世俗じみた平凡な言葉であり、表現上の丁寧さはあっても心のやさしさを見出すことはむずかしい。Rosie が嫌悪した Mrs. Barton Trafford の snobbery すら感じられる。

It was a great blow to me. No woman

could want a better husband than what he made me. (p. 233)

I'll tell you. He was always such a perfect gentleman. (p. 244)

極めて在り来りの語句、意志疎通の道具でしかない言葉で、Ashendenの心に虚ろに響く。

Rosieを描くにあたって彼女の周辺に焦点を当てたMaughamの手法は、個性は言語表現が不可能であるという断定ではなく、人間がその明確な姿を持ち得るのは他との関係の中にある時に限られるからであって、彼独特の手法ではない。この手法の追求はHenry Jamesに到達するであろうし、「意識派」の人々の基軸でもある。しかしMaughamはこの人々のように、この手法を意識的に用いたのではない。人物の潜在意識を想像豊かに描き出し、手法に新しいものを与えることを彼が注意深く避けていることは彼の他の作品からも明らかである。Rosieの発話と直接的な描写の少なさは、Maugham自身の彼女との親密さと羞恥を物語るものである。小説の前半でのRosieの描写のつましきさによって一度振りはらったSueへの関心が逆に大きくなる。小出しに喚起する描写、会話の推移によって具象化されるRosieはこうして次第にAshendenとの親近性の綱の目を織りなしてゆく。Ashenden—Maughamは彼女に対してのみ存在を確信することができ、Rosieの世界は彼に新しい秩序を与える。Maughamの満足感は創造の過程を通して自らの中に生み出された秩序への意欲であった。

Rosieの会話の表現構造は小説の内容と相即不離であり、文体に関する彼の主張が見事に肉付けされている。

#### (IV)

次に‘Cakes and Ale’の言語的特質として否定表現の多様性を考察したい。極めて日常的な表現形態である否定の諸相を作品にあてはめ、ある作家の言語表現の特殊性を論じることは困難であるが、否定表現が単に言語習慣という現象に終らず、作品のplotに関連する場合その表現を言語事実として記録し、作品の分析の手がかりとする試みは許されるであろう。

Maughamは技法に意識的になることで文の勢い、流れが失われることを恐れ、特殊な語法を特定の作品あるいは特定の場面に多用したり、個人的な表現を工夫することを避ける。見事な文章、独創的なimages、詩的幽幻性を彼の作品に見出すことはむずかしく<sup>10)</sup>彼の文

は practical proseとも名付けるべき均衡のとれた smooth な文章である。

‘Cakes and Ale’の否定表現に関して①not, never, hardly等の副詞、②none, few等、③接頭辞、接尾辞、④Implied Negation ⑤Double Negationを指標にして、否定表現の総数/文の数を調べてみると(II)において考察したこの小説の三つの時間帯<sup>11)</sup>では夫々2.4文に一個所の割合で否定表現が現れる結果になる。各Chapter毎にみられる多少のばらつき(最大:1.5文について一個所のChapter XXII, 最小:3.6文について一個所のChapter VI)はこの三つの時間という枠をはめると見事な修正を受け、見かけの不規則性は全体に通じる規則性の一部であることが理解できる。無意識のうちにこのようにバランスのとれた表現になったものか、意識的にバランスを心がけた結果か即断は許されないが、散文にふさわしい土壌として「常に適度であること」を主張するこの作者らしい結果で興味深い。

否定表現は人物の性格、生き方を描写する際に効果的に使用されている。Kearのすばらしい個性として sincerityをあげ、小説、批評、講演、文壇での活動の全てにわたって誠意を示めざるを得ない彼を賞讃と軽い揶揄の眼でみるp.12~p.16では、単純な否定表現の合間を縫って Implied Negation や Double Negationによる肯定、Implied Negationと単純否定の組合せが使用される。AshendenはKearを正面から紹介せず、否定的要素を含む描写でKearの生き方を非難する描き方をとる。MaughamのCynicismは言語的には否定的言辞の多様さによるところが大きい。

No bazaar lacked an autographed copy of at least one of his books. He never refused to grant an interview……and if he could help a struggling journalist to earn a few guineas by having a pleasant chat with him he had not the inhumanity to refuse. He generally asked his interviewer to luncheon and seldom failed to make a good impression on him. (p.14)

この筆はこびは‘The Saturday Review’がこの作品の弱点として指摘した‘a sort of defensiveness of spirit, masked behind his irony and reserve’<sup>12)</sup>の正しさを物語るものである。

更にKearとBlackstableのMrs. Driffieldを訪ねる汽車の中でDriffieldとMrs. Trafford

との奇妙な交友と、と Driffield と Amy の結婚を回想する場面での Negation の多様性、特に Nexus of Deprecation の強烈さは注目すべきである。Maugham はこうして Mrs. Trafford, Kear, Mrs. Driffield の体裁にこだわる生き方に不透明な表現を用い、間接的に Rosie の明快さを印象づけている。

一方、晩年の Rosie である Mrs. Iggulden にこの否定表現という光を当ててみると、心の乱れた Rosie の姿をうかがうことができる。Driffield との間の子供を失い、その事件から完全に解き放たれぬ Rosie の心の秘密をのぞかせる場面 (p. 235より) での Mrs. Iggulden の言葉は否定的言辭が echo のように響き、死に近い Rosie の内面の分裂が溝を深めている状況を示している。そこには無邪気な自然な Rosie の姿はなく、彼女の 'a facetious and even flirtatious character' が半ば推測された暗示である事実が明るみになる。この場面での否定表現は plot に合致し、easy style でありながら人物の心理や感覚に応じた細叙に適した表現である。

否定表現と表現内容の適合の例として① Chapter II 後半の Ashenden と Kear との辛辣な会話② Chapter VII 前半で Ashenden が the Driffields への接近を迷う場面における I don't ~ の頻出③ Chapter VIII での Ashenden の Rosie に対する疑惑と同情④ Chapter X 後半、the Driffields 失踪による Ashenden の驚愕⑤ Chapter XI : p. 125 と p. 127 で一文に 3~4 個所の否定が集中し Roy が事実を歪曲し廻りくどく Ashenden に要求する場面⑥ Jasper Gibbon の文壇よりの落伍を cynical に描く p. 154 などがある。

否定表現の感情的効果は無視できない。否定表現は望ましい状態の欠如であり、人間の不幸を物語るが、上記の plot と人物において Maugham はその失われたものを具象的に提示していると考えられる。

一方、Chapter X 前半で休暇で新しい背広を着て意気高く帰省する Ashenden を描写する場面は否定表現は殆どなく活気に満ちた情景である。更に Chapter X III の Rosie との再会の描写、Lord George の人柄を描く p. 66 でも否定表現は少なく、澄んだ歪みのない記述で clarity of style の良い例である。

否定表現を通して見た Maugham の文体は、このように表現と内容が一致した適切な文体で、彼の主張する「無造作の効果」<sup>13)</sup>が随所にみうけられる。

(V)

以上、日常的な事物の描写による action sequence、会話の一元性、否定表現の多様性について考察し、そのいずれも plot の流れ、表現内容の変化に応じて適合し、しかもその変化を意識させぬ style になっていることを述べた。この表現形式がこの小説の知的な構成を支えており、作者の意識の領域と外側の構造とのバランスを巧みに維持している。文体に関する作者の考えはこの作品を書くことによって形成されたと考えられる。

### <注>

- 1) Robert Lorin Calder : W. Somerset Maugham and the Quest for Freedom (Heinemann, 1972) p. 269
- 2) R. A. Cordell : Somerset Maugham : A Bibliographical and Critical Study (Heinemann, 1961) p. 94
- 3) W. Somerset Maugham : The Summing Up (Heinemann, 1971) p. 216
- 4) Ibid. p. 30
- 5) Ibid. p. 266
- 6) Herbert Read : English Prose Style (Beacon, 1967) p. 97
- 7) Wilfred Stone & J. G. Bell : Prose Style (McGraw-Hill, 1968) p. 57
- 8) David Crystal & Derek Davy : Investigating English Style (Longman, 1969) p. 115
- 9) Robert Lorin Calder : 上掲書 p. 177
- 10) Ibid. p. 300 によると、他の作品に若干みうけられる 'liberty, enslavement' に関する images は、この作品では皆無である。
- 11) (1) Chapter I, II, XI, XII, XXIII ~ XXVI 叙述の時間  
(2) Chapter III. V ~ X 第一の出会い  
(3) Chapter X III ~ X XII 第二の出会い
- 12) Robert Lorin Calder 上掲書 p. 217
- 13) W. Somerset Maugham 上掲書 p. 42